

陳碩甫傳

目加田， 誠

<https://doi.org/10.15017/2556582>

出版情報：文學研究. 29, pp.43-67, 1941-08-31. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

陳碩甫傳

目 加 田 誠

陳奐字碩甫、師竹と號し、晩年は蘇州南園に居て、南園老人と號した。乾隆五十一年(1786)の生れ。曾祖は朝玉といつて、崇明の人。祖父浩の時始めて蘇州長洲縣に遷つた。父植は杖芸先生と云つて三人の子があり、奐はその仲子である。幼い時、師について周官、禮、左氏春秋を習ひ、年二十に近く始めて八股文を學んだが、彼の興味はむしろ徐氏讀禮通考、秦氏五禮通考等の書物に引かれて、次第に學問の根底に觸れて行つた。嘉慶十五年、年二十五歳、江沅について小學を治める。江沅はその祖父江聲の親友で當時蘇州に寓して専ら著述に力を注いでゐた段玉裁の門に出入し、段氏の屬をうけて說文解字音韻表を作つた人である。この人が陳奐の家に来て家庭教師となつたことは色々の意味から彼に大きな影響を與へた。段玉裁の著に六書音韻表がある。段玉裁は嘗つて江沅に向つて、この音韻表については前に君の祖父江聲之を知り、今その孫の君が之を知るのみと云つた。江沅から之を聞いた陳奐は、一晝夜の力を竭して之を攻究し、盡くその梗概を會得して、段氏の所謂不傳の學、小子已に其奥を窺へりと云つた。段玉裁は江沅から聞いて、大いに之を奇としたのである。ついで江沅は段氏の經韻樓集未定本を借りて來たが、其折段玉裁は

未だ刪定を経て居らぬもの故、他人には見せて呉れるな、と固く頼んだ。月を越えて其書を返すに及んで、いつの間にか之に朱墨を加へた者があるではないか。段氏は江沅を詰つて、老人は人に見せるなと申した筈である。一體之は誰の仕業か。江沅が、きつとそれは陳家の子でありませう。と云ふと段氏はなほも細かに視てゐるが、やがて容を改めて、此者こそやがて一代の名儒とならう。其學識はもはや唐の孔穎達、賈公彥の上に出てゐるぞ。吾道を傳へん者は必ず此人だ。ひとつ往つて逢ひたいものだ、と云つた。段氏の面目亦躍如たるものがある。

そのうち江沅は汪稼門の聘に應じて去つた。陳奐はそのあと段氏の門に入つて直接教を受けることになつた。嘉慶十七年、二十七歳、長洲縣學生員に補せられたが、その冬十二月から段氏の枝園に留つて、說文解字注を校正することになつたらしい。枝園に在ること約二年、この間に段氏は彼に、所謂字を以て經を考へ、經を以て字を考へる戴東原以來の學問の方法を教へ、毛詩と說文とを學ばせた。後に陳奐が傳疏の凡例に、「此傳疏を作るについては、始め嘉慶壬申（十七年）段氏若膺先生に、蘇郡白蓮橋枝園に従つて學び、親しく師の教をうけ益を蒙りしこと數へ難し」と云つてゐる所以である。

十八年多、段氏の說文解字注は弟子の徐頤、胡積城らの力によつて刊行に着手される。始め陳奐は、我師江沅が段氏を祖父の友として尊稱してゐるのを知る故に、我亦段氏を敢へて先生とは呼ばなかつた。が段氏はその様に自分を外視して呉れるなと云つて、說文解字注第二篇を刻するに當つて、受業長洲陳煥校字と書かせ、陳奐も始めて段氏を先生と稱したと云ふことである。十九年、江沅は說文解字注後序を、閩浙節署に於て書いてゐる。時に說文注の刻は殆ど半ばを過ぎてゐた。二十年陳奐三十歳、段氏は奐に命じて、李仁甫の五音均譜の法を用ゐて、說文部目分韻

を編纂させた。三月のことである。この月又陳奐は説文解字注の跋を作つた。この春陳奐は従姪と共に海門に往つた。海門は奐の曾祖父が土地を開墾して、永くその徳を頌されてゐる古い關係の地である。此時段氏は陳奐の學が、已に唐の陸、孔の上に出てゐるを云ひ、この上は廣く見聞を増すことをすゝめて餞けとした。五月説文解字注の刻は了つた。秋になつて、陳奐は海門から歸つて、段氏に謁したが、已にそこには一生の事業をなし遂げて心身の力を最後まで使ひ果して頓に衰へた老師の姿があつた。段氏は惘然として曰ふ。我身は恰も春蠶に同じ。繭成りし上はただ斃るゝを待つのみと。まことに此人であつて始めて云ひ得ることばであつた。數十年を費して先づ長篇を作り、説文解字讀と名づけて、盧文弔が序を書いたのも已に三十年の昔になる。それから更に之を練つて説文解字注を作り、こゝに及んで遂に海内の期待に對へた。八月陳奐が南京に於ける試験を畢へて、再び師を見舞つた時は最早再起の望みは無かつたらう。二十歳餘りで病つた後は六十年來病に呻吟したことも無かつたが、此度はもはや起てぬ、と云つた師は遂に九月八日八十一歳を以て枝園に終つた。まことに段氏は一生の仕事を最後に至つて完成し、それと同時にこの世を去つたのである。弟子陳奐はこの最後の數年に親炙して、己れが師から攝取し得る限りを受けついで、更に之から學問の道に邁進しやうとする。而もこの大いなる師を失つた彼の行手には、後來更に彼に大きな影響を及ぼした高野王氏父子が手をひろげて待つてゐたのである。

二

嘉慶二十三年戊寅春、陳奐は山東東平の親戚を訪ね、その秋、順天の鄉試に應じて都に入つた。(戴望の陳先生行

狀には段氏卒を二十一年とし、明年秋都に入るとあるも、之は誤らしく、陳奐の王石臞先生遺文編次序には都に來たのを二十三年としてゐる。そして王念孫のもとを訪れたのである。己に陳奐が蘇州にゐた頃から、段氏は王氏との書信の往復に、陳奐の名を傳へてゐたものと見え（同じく王石臞先生遺文編次序）、陳奐も亦都に入る第一の喜びはこの名儒を訪れて教を乞ふことであつたらう。時に王念孫は七十五歳。陳奐は三十三歳。王念孫は北京の旃檀寺の側に住ひ、己に仕途を退いて、その子禮部侍郎王引之の邸に在つて、著述に耽つてゐた時である。陳奐がこゝを訪れた時、門番は先生が老病の爲め、一切客に逢はぬを以て斷つたが、強ひて名を通じさせると、果して足を病んで十數年も客に逢はぬと云ふ王念孫は、侍者に扶けられつゝ、奥から出て來て、まだ顔も合さぬ先に、大聲で彼の字を呼び、若膺（段王裁）の没後、君の如き高弟あるか、と喜びの聲をあげた。願くは忘年の友とならうと云つた。此時陳奐は自分の學問の抱負として、詩毛傳と集韻の研究を旨とするについて王氏の批判を仰いだ。王氏は之に對へて、學者は何よりもその托する所が尊くなければならぬといふことを述べ、集韻研究の方法を語り、自身も亦久しい間集韻の整理を志したが、先づ己れの仕事として廣雅疏証を完成するうちに、いつか月日は過ぎた。段氏も亦常にそのことを思つてゐたらしいが、之も説文注の刊行と共に世を去られた。今子は道を聞くこと蚤く、年力強ければ、先づ毛公の詩傳を治められよ、これ學者として托する所の尊きものである。而る後集韻を治められても晚くはあるまい。讀經十年、校經十年、而る後始めて著書を云ふ可し云々。此時の會話は實に陳奐一生の學問の方針を打ち立てたかのやうで、その後三十餘年の刻苦を経て、毛詩傳疏は刊行されたが、集韻の研究は遂に大成せず、年老いて陳奐が、往年の師の期待に負いたことを痛く嘆く所のものである。その日王念孫は胡同の出口まで悪い足で見送つた。この後陳奐はいつも

王氏の宅を訪れると、すぐに奥に通つて、いろ／＼と疑義を質すこと、さながら家人の如くであつた。王念孫の子、文簡公王引之も亦陳奐を敬愛し（陳奐より二十歳長じてゐた）、奐が毛詩の語助、發聲に關して研究してゐるについては、王引之はその著經傳釋詞を彼に授け、又王氏が經義述聞を著すや一卷成る毎に奐に示した。まことに陳奐の毛詩傳疏を見て、語助發聲の例はこと／＼く釋詞の例と符合する。王引之も嘗つて云つた。吾等治學の方法を同じうする上は、さながら戸を閉ぢて車を造り、出でゝその轍を一にするやうなものだと。當時王引之のもとに多くの學者が集つたが、王引之はその度びに必ず陳奐を導いて彼等と交はらせた。胡給事承珙、郝戸部懿行、胡戸部培暈、その他の人々がこの時陳奐と互に知り合つた。ことに嘉慶二十四年、胡承珙、朱琦、蔣廷恩、魏源その他の人々が集つて、鄭康成の生年を永建二年七月七日と考定し、万柳堂に於て祀典を行つたのは永く語り草になつた。時に胡培暈と陳奐とがその事に主として當つた。數十年の後、當時の友情が、之らの人の遺著の刊行に陳奐のつくす努力となつて、我等を感動させるが、それは後の話である。

道光二年程同文が奉天府々丞となり、學政を兼ねてゆくことになり、陳奐を伴つて往かうとしたが、父母在すを以て辭退し、道光三年王念孫八十の壽聯に代推小學有達人。天假大儒以長日の句を奉り、やがて南に歸る。（爾雅義疏序に道光壬午（二年）奐、汪戸部孟慈喜荀の家館す。……奐時に南歸せんとす云々）道光四年父の喪に遭ふて、士喪禮に本づいて葬禮を行つた。道光七年再び都に入るが、その間も王引之とは屢ば論學の書簡を往復してゐる。七年再び都に入つた時、王念孫は八十四歳、尙、之に見えて、その命によつて管子、荀子を校した。この年經義述聞三十卷本が刊行されてゐる。讀書雜誌の荀子には、時に陳奐の説を采り入れた。陳奐が後に弟子を導くに必ず周禮先鄭

注、集韻等と共に管子を授けたことも又王氏に淵源するか。道光八年都を出て南に歸る。途中山東に寄つて、岱山にも登つた。その後浙江に至り、杭州の汪氏の家を聘せられる。陳奐が南に歸つた後も、王引之との間には屢々論學の書信が往復されたが、王念孫は道光十二年正月、八十九歳を以て卒し、翌々十四年十一月、王引之も亦六十九歳を以て卒した。

三

汪遠孫と陳奐との關係は、陳奐の作つた汪遠孫國語校注序によれば甲申（道光四年父の卒せし年）武林（杭州）に至り、汪中書小米と遇ふ。時に吳越の間に往還し、未だ嘗つて與に居らざる也。癸巳（十三年）汪小米が吳氏の爲めに杭郡詩輯を校刻するに當り、招かれてその家に寓す云々。已にその前辛卯の年、王引之に贈つた手紙に、去秋里に歸り、今春杭郡に來りて、汪遠孫と交りを結ぶ。汪君の家、書に富み、亦聲訓の學に習ふ。相つれて業を同うす、云々。時に陳奐は西湖畔の寺に棲んでゐたらしい。十三年になつて汪氏の家を聘せられ、同居するやうになつたのであらうか。汪家には所謂振綺堂藏書あり、汪氏亦學を勵み、漢書地理志、春秋、國語、及陸氏經典釋文を研究し、國語發正その他の著あり、陳奐が之を助けたことも少くなかつたらう。汪氏は詩人としても名聲あり、西湖の吟社の一人であつた。（陳奐より少きこと八歳）之より約二十年の間、陳奐は汪氏の西湖水北樓に寓したのである。その長い間、陳奐はひたすら著述に耽ることが出來た。只その間一時、胡承璩の郷里涇縣に招かれて、その遺著を校讎したことがあつた。

陳奐と胡承珙とが相知つたのは、前に嘉慶二十四年七月、北京の万柳堂に於て鄭玄の祀を行つた時以來である。胡承珙は乾隆四十一年に生れ、(陳奐より十歳年長)字景孟、墨莊と號した。嘉慶十年の進士、翰林院庶吉士より編修を授けられ、十五年廣東鄉試副考官となり、ついで御史に遷り、給事中に轉じた。二十四年順天鄉試同考官となる。この年陳奐は万柳堂で知り合つた。胡氏はその冬福建に赴任したが、その後も陳奐との間に互に毛詩を論じて書信の往復があつたらしい。胡氏は福建の任について、保甲制度を編查し、よく匪賊の跡を絶ち、つゞいて臺灣兵備道となり、盜を捕へ、善政を行つたと云はれるが、道光三年假を乞ふて安徽涇縣の郷里に歸り、その後道光十二年に歿する迄九年間、足、里門を出でず、外事に預らず、専ら著述に耽つた。かねて胡培暉とことに親しく、嘗つて都に於て、胡培暉は彼の邸に寓して儀禮疏の稿を起してゐたが、朝夕談論し、胡承珙は鄭氏注の中、古今文異字を引くについて特に専門の研究をして、君の疏を全うしやうと約し、その後臺灣に在つても常に之を心がけ、遂に儀禮古今文疏義を作つた。この人は役人としても相當の功績があり、又文藝の方面にも才がすぐれてゐたので、後に胡培暉の作つた福建臺灣道胡君別傳の論に「凡そ經學に専心し、考證に精しい人々は往々にして文藝の才拙く、たとへ文章は巧みでも、詩となると必しも巧みでない。之を兼ねることは仲々難しいからである。又窮乏の中にあつて、ひたすら學藝に勵む人の、文章學問は當時に高くもてはやさるゝとも、遂に一生不遇に終るものが多い。然るに君は經學詩文共に卓然として後世に傳ふ可く、而も年若くして進士に及第し、樞要の地位を歴、中年臺灣の任に赴き、官吏としての業績も偉大なるものがある。これ生れ乍らにして夙慧あり、天より授かるもの特に君に厚かつたのではあるまいか」と云つてゐる通りである。

胡承珙も亦小學に精しく、爾雅、説文に心を究め、ことに小爾雅に就いて研究して、小爾雅義證を著し、その他春秋三傳文字異同考證などの作もあつたが、彼の畢生の精力は實に毛詩後箋の著述に注がれた。毛詩の研究については屢ば陳奐と書信の往復があつたらしい。毛詩後箋中、往々陳碩甫曰、と引かれてゐるのはこれによる。然し彼は毛詩を主とするとは云へ、後に述べるやうに陳奐が、専ら毛傳を守るのとは行き方を異にする。胡培暉に與へた手紙にも、自分の後箋は専ら詩の毛傳を明にするを主とするものである。鄭玄の箋といふものは、毛傳を申べてゐるやうで實は毛傳の本意を得てゐないものがあり、又毛傳と説を異にして實は毛傳の説に及ばぬものがある。思ふに毛公は秦の人、時代も周を去ること甚だ近い。従つてその言語文字名物訓詁など已に鄭玄のやうな後漢の人からは充分に通じ得ぬものがあつたに違ひない。況んや唐人に於て、又宋人に於てをやである。拙著後箋に於ては、毛傳に従ふ者十の八九、鄭箋に従ふ者十の二三。始めは之をその詩その篇に於て考へ求め、それで解らねば詩經全體に考へ求め、更に得ねば他の經典に證を求め、又得ねばその上は泛く周秦の古書を稽へた。言語文字名物訓詁に於て、往々前人の未だ云ひ及ばなかつたもの數十箇條を下らぬ、と云つてゐる。又魏源に與へた手紙に、「承珙詩に於ては毛傳を墨守するも、ただ之を經文に揆りて實に通じがたきもの有る上は、之を捨て、他の證を求めたり。たとへば弗躬弗視、庶民弗信の句の如き、毛傳には庶民之言不可信と謂へど、左傳、國語、淮南子、説苑に此詩を引く者皆謂ふ、民上を信ぜずと。これ箋説のもとづく所にして、經文前後の意味に尤も順當なり。故に宜しく傳を捨て、箋に従ふべし。されどかゝる者は僅かに十の一二のみ」と。

此の點陳奐が終始毛傳を主とすることを以て目的とした行き方と非常に異り、胡承珙は何よりも經文に順といふこ

とを第一として解釋を求めた。陳奐の書いた毛詩後箋の序にいふ、必ず曲折を以て通を求め、その引くところ博く、その指は約、といつてゐる通り、後箋を讀むといかにも通を主として博引旁證、而もその結論は簡潔である。

道光十二年、胡承珙は年五十七を以て卒した。病の床に在つても猶ほ沈吟默誦倦まず、最後まで力をつくしたが、遂に魯頌泮水篇以下は業を卒へず、未完成に了つた。道光十四年甲午の歲、胡承珙の嗣子は、亡き父の遺書を刊行するにつき、平生學問の交り深かつた陳奐を、その郷里の宅に招いて校讎を依頼した。この時陳奐は嗣子の請によつて、毛詩後箋最後の泮水以下を自ら補つて完璧の觀あらしめたのである。時に陳奐は己に四十九歳。彼の毛詩の學は己に日に月に進んでゐたが、もとゞ京師に於て胡承珙と知るや、胡氏が専ら毛詩を研究しつゝあるを以て、必ず毛詩の經傳全體に亘つて注釋書を作るものと思ひ、己れはただ爾雅にならつて義類を編し、凡そ聲音訓詁の用、天地山川の大、宮室衣服制度の精、鳥獸草木蟲魚の細を夫々分類したものを作つてゐたのであるが、今胡氏の書を見るに、それは全體的な註釋でなく、特に傳義を列擧する方法をとつてゐるのを知り、こゝに初めて自ら詩毛傳の疏を作ること決心したのである。

四

こゝに陳奐とは直接の關係は無い乍ら、胡承珙との關係から、馬瑞辰の毛詩傳箋通釋について一言したい。

馬瑞辰は安徽桐城の人、乾隆四十七年に生れた。父宗樾は嘉慶六年の進士、(翌年卒)この宗樾は少うして舅氏姚鼐について古文詞を學び、又古訓に精通し、後邵晉涵、任大椿、王念孫と遊んでその學もいよく進んだ。經を解す

るに必ず先づ訓詁に通ず可きことを主張し、後に阮元が浙江に於て諸學者を萃めて經籍纂詁を編した時、その凡例はかつて馬宗榘、孫星衍達と手訂した所のものであつた。多くの著書及詩集がある。

その子馬瑞辰は嘉慶十年の進士、翰林院庶吉士より工部營繕司主事を授けられ、郎中に擢でられたが、事によつて盛京に流され、召し還されて、工部員外郎となり、復事に坐して黒龍江に流される。幾くもなくして釋されて歸り、その後、江西白鹿山、東嶧山、安徽廬陽書院の講席に主となつた。毛詩傳箋通釋の自序によると、少き時より詩經を喜び、得る所有る毎に之を篋笥に藏して未だ出さず、弱冠京師に遊んで多くの學者と交つてその學を廣め、四十以後致仕して意を仕途に絶ち、専ら經術に心を殫し、爰に少壯より采獲せしところ、及孔疏、陸義の尙人を肯んぜしめざる者に於て重ねて研究し、三家詩を以てその異同を辯じ、經全體を以てその義例を明にし、古音古義を以てその譌互を證し、雙聲疊韻を以てその通借を別ち、十有六年を経て遂に成り、初めは毛詩翼注と名づけたが、後に傳箋通釋と改めた。鄭箋と毛傳を兼ねて述べ、孔穎達の疏を正し、敢て黨同伐異をなさず、只實事求是、以てこの大著を成したといふ。吾々がこの書を讀んで先づ第一に感ずるのは、その立説の大膽さであらう。文字の通借を以て解してゆく方法の思ひ切りのよさである。いはば一種の霸氣といふやうなものを第一の印象として受取らずにゐられぬ。後にこの人の生涯を知つて始めて學問も畢竟その人の性格によるものであるとの感を深くしたのである。殊に彼の最後を知るに至つて一層この感が起るが、それについては後に述べる。この人は豊頤長身、言論娓娓々々、勤學著書倦むを知らなかつたといはれる。

毛詩傳箋通釋の例言にいふ、詩經の注釋に於ては、毛、鄭が最も古い。鄭志答張逸にいふ、詩に注する當つては

主として毛を宗とし、毛義隱略なるときは、更に之を表明せりと。すなはち鄭玄の主旨はもとより毛傳を明にするに在り、その箋に於て往々經文を他の文字に讀みかへて説明してゐるが、實は必しも毛傳を改めた譯ではない。しかるに唐の正義には、誤つて之を毛鄭異義と見做してゐる。又同じく張逸に答へて、もし毛傳に贊同し得ぬものがあれば、その時は自分の意を下したといふ。しかるに正義には又そこを誤つて、しひて傳箋を合せて同一の考のごとく見做してゐるものがある。今その兩者の同一の點や異なる點を疏通證明するが故に、傳箋通釋と名づけたのである。又三家詩と毛詩とは、各家法があるも、實は異流同源のもの、凡そ三家の遺說にして、傳箋と相證すべきものがあれば、夫々廣く引證し、是非を判つて本來の一致に歸せしめた。今此書に於ては先づ毛鄭の説を前に列ね、次に唐宋元明の諸儒及國初以來各經學者の説の、漢儒に較べて勝つたものがあれば、皆采取して、門戶の見を打破しやうとした。考證の學はまづ何よりも經を以て經を證し、實證を以て眞是を求めに在る。従つて證を取る所が人と屢ば同じになる上からは、その結論も又人とはからずして一致することも止むを得ない。自分が以前この詩經を研究してゐた際、郝蘭皋、胡墨莊と互に意見が一致する所があつた。その說謀らずして合したものが多かつたのである。之は互に人の説を襲つて我説としたものではない、云々。清朝漢學者が師法を守ることを第一とし、ひたすら漢學を主としたのに對し、彼が宋元明の學者の説をもとり入れて、特に門戶の見を闢くと云つてゐるのは、やはり彼が桐城の人である關係も一應考へられやうか。

こゝに彼と胡承珙との關係を知るには、彼の書いた胡承珙の毛詩後箋序を見るに如くはない。曰く、「毛詩後箋三十卷、余が同年の友胡觀察墨莊の著。墨莊は性沈靜にして嗜欲少く、獨り著述にのみ耽る。凡ゆる經典に互つて通ぜざ

るなく、ことに毛詩がその専門で且つ精しかつた。以前、余と共に京師に仕官し、余も亦好んで毛詩を研究し、朝夕往來して、心に得る所あれば、互に質問し、往々期せずして一致したこともある。思ふに毛詩は詞義簡奧、淺學のたやすく推測し得るものではない。唐人が正義を作るに當つて、屢ば魏の王肅の説を引用して、毛傳の意義を演繹するものと云ひつゝ、實は毛氏の趣旨を誤つてゐるものがある。鄭玄が詩の箋を作るに當つては、毛傳を主として、毛傳の意味の明かならぬところは、或は經文の通借されたる文字の正字を出し、或は旁訓を加へて之を疏通證明し、それらは皆毛氏の説を易へたのではない。然るに正義では、毛傳に於て詩の文字を他字に讀みかへて解釋する所謂破字の例なしといふ考に拘泥して、箋が特に毛傳を明にせる所を以て、却つて毛傳の意義を改めたものと見做してゐる。又鄭玄は初め張恭祖に從つて韓詩を授かり、兼ねて齊詩魯詩にも通じ、その考に往々毛詩とは説を異にするものもあり、之らは三家詩説にもとづいて、之に己が意を參へてゐるのである。然るに正義では、又誤つて、毛傳と鄭箋とを同一に見做してゐるものがある。余は墨莊と共に此點に意を注いだ。凡そ援據する所、説文、字林、玉篇、廣韻、及經傳子史に引用せる詩の文句、又近人の詩を説くもの惠氏の詩説、古義、陳氏の稽古篇、段氏の詩小學、阮氏の校勘記、王氏の經義述聞、孔氏の詩義卮言、李氏の毛詩袖義等、出来るだけは廣く參照引用した。かくて我等はその考も同じく、方法も同じく、援引する所も同じく、從つてその説が期せずして一致せしものあるも亦當然であらう。故に余の註する所は毛詩傳箋通釋と名づけ、墨莊はその著書に毛詩後箋と名づけ、名は異なるもその實は同じである。今墨莊已に古人となり、嗣君仲池、その書を持して余に序を請はる。余受けて之を讀むに、その書毛氏の義を申述するを主とし、注疏の外に、唐宋元の諸學者の説に於ても、毛傳と相照らして明にするに足るものは廣く引徵せざるはなく、名物訓詁、

及毛詩と三家詩との文字の異同について、類ね剖析精微、折衷至當、余の説と大略同じである。而も徴引する所、余よりも博く、余が多年疑を抱きつゝ尙解決の端緒を得ぬものにして、此書を讀めば、さ乍ら首の目を開かるゝ思のするものもある。亦余の説と互に意見を異にするも、而もその説を共に存して、後人の論定を待ちたいものもある。墨莊は昔余と約し、書成る曉は、互に序を爲らうといつた。今余の書も略完成し、序を墨莊に求めんとするも今やその人なし。且つ墨莊の此書は實によく毛詩を集大成し、異同を批判し、白黒を辨別せるもの、余既にその説の精核にして、世にあらはすべき者百數十條を寫し、余が書に補入して、わが篤き敬服の心を示さうと思ふ（道光十四年）

之によつて馬瑞辰と胡承珙との關係を察知することが出來、又馬氏の書に屢ば胡氏の説を引用してゐる次第が明にならう。胡氏の卒したのは道光十二年、陳奐がその遺書の校讎に當つたのが道光十四年、馬瑞辰のこの序が同じく道光十四年。そして陳奐が毛詩後箋の序に同書刊行の顛末を記したのが道光十七年である。馬瑞辰の傳箋通釋は道光十五年には刊行された。馬瑞辰はこのほか蔡邕月令章句二卷がある。

道光三十年洪秀全兵を起し、之より十數年に亘つて太平天國の亂は江蘇浙江安徽その他を荒しまわり、中國の中心たる可き地方の文化を徹底的に破壊した。咸豐三年、賊は舒城に入り、廬州を陥れ、遂に桐城に及んだ。この時馬瑞辰の仲子馬星曙は害せられ、季子馬三俊は義勇軍を組織して賊を禦いだ。馬瑞辰は子孫に奉ぜられて唐家灣に身を避けたが、數日の後賊は遂に此唐家灣をも圍んだ。この時、人々が驚き慌て、逃れる中に、一老翁その居に止つて偃坐するものあり、賊がその姓名を問ふと、大言して「吾は前の翰林院庶吉士工部都水司員外郎馬瑞辰也」と云つた。賊は降服をすゝめたがもとより頑として聞かず、否、吾れ國恩を受け、官を罷めて郷居すること數十年、一として國に

報ゆる所もない。今亂を聞いて、二人の我子に義兵を擧げさせた。子孫の者共が俺を強ひてこゝに身を避けさせたが、今や城は陥り、仲子は之に死し、少子は軍營に投じ去つた。恨こそ多い。何條降服するものか。降らねば必ず殺すぞ。よし殺せ。尙も降服をすゝめると大いに怒つて、汝らは賊を主人と仰いでゐるが、俺には俺の主君が在はすのだと大いに罵つた。

賊卒は彼を引き出し、その室を焼き拂つた。馬瑞辰は罵ること愈々厲しく、一里を曳かれて尙その聲をやめず、遂に道傍に殺されたといふ。之は方宗誠が、趙星甫といふ一時賊中に陥つてゐたものから賊の仲間を聞いて感動して記した文章で、賊も亦この義人を見て贊嘆したといふ。(方宗誠馬元伯先生死事。馬徵君遺集、續碑傳集。)この時賊の爲めに死んだ馬氏の一族は、馬瑞辰、その子馬星曙、その孫馬登瀛等男女大小十一名。馬瑞辰の季子馬三俊も、義兵を起して父の仇と戦つて屢ば之をくるしめたが、翌四年六月遂に戦死した。朝廷に於てはこの父子の忠義を郵み、特にそのために祠を建立して忠魂を慰めた。大體桐城派の學問文章といふもの、毀譽様々乍ら、やはりその大義名分を重んずる氣分が此地に傳つて、空言ではなく、こゝに生れた馬瑞辰にもその精神が發揮されたとも見られやうか。馬瑞辰は卒時年七十二。その毛詩傳箋通釋が出来上つたのは彼が五十四才の時であつた。子三俊、學は程朱を宗とし、兼ねて陸王の旨を取るといはれた。三俊の遺著に馬徵君遺集あり、左宗棠が序を書き、友人方宗誠(方東樹の從弟)が馬徵君傳その他彼の遺事を書き加へてゐる。

さて話は再び陳奐に戻る。陳奐は胡承珙の遺書の校讎を畢へて又西湖の水北樓に戻つたが、或日汪小米（遠孫）は陳奐に云つた。近代の人々が毛詩を治めるには必ず同時に鄭箋を兼ねて説いてゐる。専ら毛傳を主として説くことはぜひ君に俟たねばならない。一つ大毛公の傳の爲めに純粹な疏を作つては如何。又陳奐は本來身體も強壯では無かつたので、小米はいふ、吾等の精力は到底古人に及ばず。もし中途でたほれるやうなこともないとは云へず、またその仕事を承けつぐ可き子孫も無かつたとしたら、早く今の中にするだけの事をしてをいた方がいゝと。陳奐は先に胡氏の遺書を校讎して感ずる所あり、今又こゝに汪氏の言葉を聞いて、遂に意を決して、從來作つてゐた毛傳の義類を改めて、こゝに毛詩の全般に亘つて、詩毛氏傳疏の作成にかゝつた。時に道光十五年乙未の年である。（汪氏國語校註三種の序）汪小米も亦國語の研究に専心し、共に切磋の功をはげんだが、翌十六年丙申の四月、ふとしたことから病つた汪氏は、次第に重く、疾篤きに及んでも尙註釋をつゞけて匪勉已むことなかつたが、五月の初め、忽焉としてこの世を去つた。年僅かに四十三。卒するの日、弟汪适孫は、その兄の遺書を陳ねて陳奐に校讎の任に當らむことを請ふた。陳奐は死せる朋友の爲め喜んでその請を承諾した。奐自らも亦傳疏の仕事が続けつゝ、かくて寒暑少しくも間なく、數年を経た。适孫は兄の像を堂壁の間かけ、陳奐は之に句を題した。君去更無知己友。我留且讀未刊書。蓋しその實を記せしなりといつてゐる。道光二十年庚子傳疏の業も成り、适孫は之が刊行を計つて、四月六日傳疏の刊刻は始められた。しかるに、二十三年癸卯十月、适孫が又病を得て急逝した。兄の小米にたゞ一子あり、この時年二十。沈靜書を好み、奐亦之に讀書切要の法を教へたが、不幸はこの一家に更に重なつて、翌二十四年、之亦死んで了つた。この間の事情は國語校註の序に、陳奐が悲痛な筆を以て誌してゐる。このやうなことの爲めか、傳疏の刊刻は

二十七年丁未八月七日に至つて始めて完成した。

六

さて陳奥の詩毛氏傳疏について語る時が來た。此の書はその名の示すが如く、詩の毛傳の疏である、といふ立場を固く守つたものである。敍録にいふ。

ト子子夏、親しく業を孔子の門に受け、詩人の本志を隱括して三百十一篇の爲めに序を作つた。子夏が序を作つた時、六笙詩は尙存したのであ數傳して六國の時に至り、魯人毛公、序に依つて傳を作る。その序の意尙盡さぬ者は傳もて之を補綴し、話訓に於て特に詳しかつた。之を趙人小毛公に授けた。……齊魯韓の三家も孔門七十子の徒に出たものではあるが、孔子歿きあと、微言は已に絶え、道はさまざまに分れて異端の説は一時に起つたのである。或は又詩を借りて時君を諷諭し、もと刺詩でもないものを以て刺詩となし、詩人本來の志と違つた。かゝるが故に齊魯韓の三家詩は廢す可きも、毛詩は決して廢することは出来ぬ。齊魯韓三家の詩說すら、毛詩と抗衡することが出来ぬのを、ましてそれ以後の詩說に於てをや。……鄭玄は漢の末に生き、初め東郡の張師に従つて韓詩を學び、後に毛詩の義のよき精なるを見て、好んで之に箋を作つたが、而も亦間々魯詩の説を雜へ、併せて己が意を之に參へた。されば固より彼が箋の趣旨は、盡くは毛傳の義と同じではない。魏晉の時代になつて、鄭玄の學は既に廣く行はれたが、王肅は鄭玄を嫌つてつとめて毛傳を申べて鄭玄を難じたが、而も結局毛傳の精微を得るには至らなかつた。唐の貞觀年間、孔穎達が正義を作り、傳箋を併せて疏を書いたので、之から毛鄭兩家が合さつて一家の書となつて了つた。近

代詩を説くもの、皆毛鄭兩家を併せ習ひ、時代の前後を分たす。

毛は齊魯韓の前にあり、鄭は四百餘年も後のものである。

一家を專修することを

尙ばず。鄭玄の箋を作つた趣旨を審にせず、又毛傳が語簡にして意深く、容易に之を理解し切れぬのに苦しんで、何れも正しい解釋をなし得ず、今に至るまで觀る可きものなく、二千年來、毛傳はあれども亡きが如き有様である。云々。

彼は詩序を子夏の作とすることについて敢て疑を挾まず、又大毛公が六國の人であつて子夏の序によつて傳を作り、序に於てその意を盡さぬものあれば之を傳に補ひ、ことに詁訓を詳にしたものである故に、序と毛傳とを以て最も古義に近いものとする立場を固く執つた。鄭玄の箋は三家詩の説を雜へ、又己れの意を參へたものであるから、決して毛傳と一つにして考ふ可きものでないとの理由で、箋を全然切り離して、毛傳のみの疏を作つたのである。乃で今詩を解くに、西漢以前の説を用ひて、東漢の人の詩を説くものを不用意に用ひず、たゞ毛氏の學はその源は荀子に出で、後によく毛氏を承くる者は鄭仲師、許叔重の兩家であるとして、鄭衆の周禮注、許慎の説文解字には説を取る所が多かつた。この兩者は陳奐が平生好んで弟子に教授したものである。かくして「或は引申、或は假借、或は互訓、或は通釋、或は文上下に生じて害なく、或は辭、順逆を用ひて違はざる」を明にし、要は吟詠性情性詩人の本志に合する有らむことを求めたといふのである。

弟子張星鑑の記す所によれば、奐は嘗つて云つた。凡そ學問をするには西漢から入る可きもので、東漢の人は、名物象數を言つて精確でないことはないが、しかもそれはむしろ意有つて經を説いてゐるので、西漢の人の無意に流露せる一二の語は、東漢の人の千百言に勝つてゐる、云々。又戴望の記すところによれば、經典を説くには師法を守ること

が大切である。一家を守らず、あちらこちらと出入旁雜することは、まことに道の賊といふ可きだ。魏晉このかた、陋儒たちは大概自分では集大成だと稱して色々採りあつめつゝ、而も經の本旨を彷彿し得ぬもの多く、之らは奴婢の智にも及ばぬものだ。

上にも明かなごとく、陳奐は詩序を信じ、毛傳は、序によつて作られた最古の詩の註釋として尙んだのである。「故に詩を讀んで序を讀まねば、それは本のない學問である。又詩と序を讀みつゝ、毛傳を讀まねばそれは守りを失つた學問である」。

かく云へば今毛詩を讀んで、序と傳との一致せぬ如き箇所が少からずある事は誰しも氣付くことであるが、そこらは彼は如何に扱つたらうか。一例をとれば小星篇の序にいふ。「小星。惠及下也。夫人無妬忌之行。惠及賤妾。進御於君。知其命有貴賤。能盡其心(此小星の詩は夫人の恵がよくその下にまで及ぶことを作つたものである。夫人に嫉妬の心なく辨へ、皆その心を)とある。此詩の文句に「實命不同」とあるによる。がこの詩は三家詩の方では、卑官奉使の意に解し、(韓詩外傳、易林)卑しい身分のものが遠く使に出て勞苦し、「實に命同じからず」と嘆くものと解釋されてゐる。鄭玄は序によつて詩に箋したから、此れを、賤妾が、夜、衾と裯とを抱いて君側に通ふ詩と解釋した。しかるに此の詩の毛傳には何とあるかといふと、「或早或夜、不得同於列位也」としてゐるので、列位といふ言ひ方から考へてもむしる三家の説のやうに、卑い身分の官人が、朝にある列位と命を同うせずとの意味に毛傳も解してゐるものと見た方が順當かと思はれる。けれど序を子夏の作として信じ、その序に賤妾云々とあり、傳は全くこの序によつたものときめた陳奐はこの列位を以て賤妾に對する貴妾のこととし、又傳に小星とは「衆無名者」と云つてゐるのを即ち

序の賤妾の意味に解して、この毛傳と序とを一致させたのである。

傳箋異同の場合、陳奐が専ら毛傳に従ふことは云ふ迄もないが、その興味ある一つは生民の詩の履帝武敏歆でこの句の意味を毛傳によれば、姜嫄といふ女性が、帝嚳に配し、帝に従つて郊禘を祀り、その態度がつゝしみぶかかつたのによつて、神にその誠意を饗けられて、子供を授る、といふ事になる。鄭箋によれば之が感生説話の一つとなり、姜嫄が帝(上帝)の拇のあとを踐んで、心體に感じて后稷を生むといふ話になる。爾雅釋訓、楚辭、史記、列女傳、春秋繁露、白虎通、三家詩説、皆この後者の説である。(之は玄鳥の詩を鄭玄は卵を呑んで契を生む感生説話とするも、毛傳には只玄鳥至るの日郊禘を祀つて契を生むことゝせるに同じ)

胡承珙は毛を主とし、十中八九迄は毛傳により、但文意の順なることを求める立場から、之についても矢張り毛傳をとり、經文及傳の言ふ所はそのまゝで至つて平易なことであり、當時姜嫄が祀つて歸り、先づ心動き、その後懷妊したので恐れて棄て、吉凶を試したので、古、人情淳樸の時代には有る可きこと、それを徒に後人の穿鑿に成る怪しき圖讖の説には従ふ可きでない、と云つた。

馬瑞辰は經文及周禮に合せて考へ、帝はやはり闕宮の詩の上帝是依の上帝であり、敏と拇とは雙聲、同じく明母、假借通用すべく、この説は爾雅釋訓その他相傳へて久しいものであると、古來跡をふんで子を生む説話、卵を呑んで子を生む説話を數へ擧げ、由來久しい考として鄭箋に従つてゐる。但し馬氏の説は歎の字を忻に讀み、心忻然として之を踐む意味の倒文と見た。

陳奐はかういつてゐる。爾雅に武は迹、敏は拇といへど、この釋訓の一篇は漢人の増益を経たものなる故、之は漢

人の思想であるとし、始め毛公が傳を作るには未だかゝる讖緯の説によるものでなく、最もその正を得たりといふ。

次に胡承珙の項で擧げたやうに、毛傳が順當ならざる場合の例、節南山の弗躬弗親、庶民不信、その毛傳に庶民之言不可信とあるもの、箋には、王が政を躬自ら親しくせねば、恩澤衆民に信ぜられずとあり。胡氏は左傳、國語、淮南子、說苑等に此詩を引用した場合皆民が上を信ぜずの意味であり、箋は之に本づき、經文に順なるものとして、この場合は毛傳をすて、箋説を採つた。然るに陳奐は之も毛傳の言不可信の四字は、今君子が躬ら庶民を率ゐることが出来ねば、庶民は上の言に於て肯て信從せずの意味であるとして、歸する所は箋の説と同じであるが、毛傳のこの四字を特にそのやうに連讀しやうとしたのである。無理は免れまい。けれども、飽く迄毛傳を生かさうとする上は、毛傳に於て當然不合理と見えるものも、實は讀み方が悪く、理解が乏しいからであるとの行き方をとるのである。

かやうな例はいくらも擧げることが出来るが、之らを以ても一應陳奐の傳疏の方法は察し得やう。この毛傳に對する絶對的な尊敬、それは獨りこの人のみならず、支那の學者の間に於ける、古き注釋といふものゝ權威を充分考へねば理解出来ぬ。嘗つて王氏に見えて、先づ陳奐の云つたことば、「大毛公は六國の末に生れて詩傳を作る、皆古文にして東漢の群儒と殊なり。云々」と云つたその心持を以て終始一貫してゐるのである。

かくて傳疏は、毛詩の舊によつて三十卷に分ち、別に古今の音の變化を考へて毛詩音四卷を作り、又毛傳の義の爾雅に具はれるものもあり、爾雅になきものもあるので、爾雅の體裁によつて毛詩傳義類を編した。この後者は、嘗つて胡培翬のすゝめによつて試みたものであつた。毛詩説を作つて、或は本字借字同訓説、一義引申説、を始め、毛傳

淵源通論、毛傳と爾雅の同異、三家詩と毛詩などを論じ、又宮室宗廟の圖、文王受命七年表、周公攝政七年表、衣服器物圖など、傳疏の文中に於ては明にし難いものをとつて或は條例をあげ、或は圖表を畫いて説明した。そのほか更に鄭玄の箋中、三家説を用ひて毛傳を申べ、或は毛傳を改めたと思はれるところを考へて鄭氏箋考徴を作つた。まことに家法を守ること謹嚴、畢生の思力をこゝに蓄萃した作であつた。

七

道光二十九年(?)兩江總督陸建瀛は、陳奐を南京に招いて色々書物を校刊させた。之は陳奐にとつては充分意義のある仕事であつた。といふのは、その折校刊したのは皆嘗つての友人の遺著であり、久しい間之を世に顯したく思ひ乍ら自分にはその資力がなかつたものを、この人にすゝめて刊行させる機會を得て、こゝに朋友の義を果すことが出来たからである。

その一つは郝蘭皋の爾雅正義であつた。道光二年、奐が京師に於て汪孟慈の家になつた頃、郝氏は己れの爾雅の疏の原稿を持つて來て、その四十年の苦心を語つた。この人は毎夜深交に及ぶ迄、常に老妻と香を焚いて對坐し、異同得失を考へ、議論の合はぬ時は往々互に反目するといふやうな譯で、草木蟲魚については多く自分の實驗したところにもとづき、只訓詁に大切な聲音について自分に自信が乏しいので、陳奐にその訂正を依頼したものであつた。然し陳奐は當時まもなく南方に歸らうとしてゐたので、その頼みを引き受けることが出来なかつた。間もない道光五年郝氏は六十九才を以て死んだ。王念孫はその原稿に削刪を加へたが、その後二十餘年、原稿は轉々として出版の機會も

なかつた。道光二十八年陳奐は杭州で、王念孫手定のこの稿本にめぐり合つた。適ま陸建瀛に招かれて校讎に當ることとなり、先づこの原稿を寫し、王氏の手定本によつて重修刊行することが出來た。(己酉二十九年陳奐の序。但しこの版は足本ではない。)

次は金鶚の求古錄禮說である。金鶚との交際のはじまりはまことに興味の深いものがあつた。金氏は嘉慶二十三年優貢を以て都に入つた。陳奐は偶ま内城の張氏の邸に寓してゐたが、夜半讀書の聲が壁戸を洩れるのを聞いて、恐らく科學に應ずる者の勉強であらう、と思つてゐるうちに、よく聞いてゐると、朗々として禮記を誦してゐる。翌朝衣冠を正してこの人を訪問すると、拒んで納れぬ。闔を排して入ると、彼の意甚だ悦ばざるが如くである。彼も亦こちらを受験生と思つて侮つたらしい。陳奐が強ひてそのしてゐる仕事を尋ねると、彼は草稿を机上に擲つて云つた。

「此れは受験生の勉強ではない」。陳奐は敬しく之を読み、讀んで「大夫三門」(求古錄の第二項(大夫三門考あり))に至つて、共に

語らうとすると、彼は容を改めて、「さては君も亦此道を知る人か」と、陳奐を座に挽いて、相見ることの晚きを恨んだ。しかるに兩月ならずして二十四年正月一日、金鶚は死んでしまつた。陳奐はその後の稿本を探ねたが、轉々として所在を明にしなかつた。胡承珙の後箋の中に、時々その説を引用してゐるのを寫しとつてその片鱗としてゐるが、後に陳奐が汪氏の水北樓にゐた頃、始めて鶚の嗣子金城が縣の學生であり、先人の業を守つてゐるのを知り、之を編して求古錄禮說十二卷とした。幾くもなくこの者が又死に、さる人が之を持ち歸つてその中一卷を見失つた。

道光三十年、陳奐は陸立夫にすゝめて遂にこの遺著を出版することが出來た。陳奐の記した跋に、この一切の顛末をしるし、遂に朋友の義を果したことを喜んでゐる。求古錄禮說(十五卷)郷黨正義(二卷)がこの時に成り、後潘祖蔭に

よつて禮説の補遺(二卷)が刊行された。

當時又胡培暉の儀禮正義も刊行にかゝつた。胡培暉と陳奐はやはり嘉慶二十四年の頃、京師に於て知り合つた學問の友であつた。しかし乍らこの時此書は巻帙多きため、後まわしになり、まだその工を竣へぬ間に太平天國の争亂となり、咸豐三年賊が南京を陥れるや、陸建瀛は節に殉じ、刊刻のことは自然中絶となつた。後、同治七年になつて、胡培暉の甥の肇智が、陸氏の孫から此書の板を貰つて遂に出版した。(尙この儀禮正義は未完成のものであつたが門人の楊大培が士昏禮、鄉飲酒禮、鄉射禮、燕禮、大射儀の五篇を補つた。胡承珙と胡培暉との交友は上にのべた。)之らの事實を考へると、まことに學者が心血を注いで書いたものが、遂に世にあらはれる迄の運命といふものに興味をもたず居られない。

八

陳奐は陸氏のもとで校讎に任じ、年を踰えて歸つた。咸豐の初め(楊峴の陳先生述には元年とあり)孝廉方正の科に擧げられたが辭して就かず、その中に長髮賊の亂は次第に擴がり、悲劇は至る所で行はれ、當時に遭遇した學者の運命も亦艱難を極めたものであつたことは諸家の傳にも詳らかである。咸豐三年馬瑞辰が害に遭ひ、その子三俊が戦死したことは前に述べた。陳奐も咸豐三年二月塵を避けて蘇州から無錫芙蓉山八字橋に徙つた。その後又蘇州にかへり、南園に居て弟子を教授してゐたものと思はれる。張星鑑、馬釗、戴望、楊峴など皆この頃の弟子であらう。

(戴望の陳先生行狀に、咸豐七年秋、先生に從つて毛詩を受くといつてゐる。)その間、無錫へ屢ば往來したやうに

思へるが（張廉舟傳）、咸豐十年四月三日陳奐が無錫に行つた時、恰もこの頃湖南から東に移動して來た長髮賊は、無錫を犯して、十日無錫の城は陥り、焚掠甚しく、十三日蘇州も亦陥つて、陳奐の家の者も多く難に死し、再び蘇州の家に返ることが出來ず、その間奔竄十一ヶ所、六月陸山に義兵が擧るや、陳奐も老人乍ら招かれて事を謀つた。當時の有様たるや、まことに慘痛を呼わめ、聞く所聞くに忍びず、見る所見るに忍びざるものがあつた。その後又奮によつて無錫八字橋に身を置いてゐたものゝやうである。彼の弟子馬釗が丹陽で死んだのもこの咸豐十年で、馬釗は陳奐に従つて學び、六書音韻に通じ、集韻に力を用ひ、師の屬をうけて集韻校勘記を作つた人であるが、この時戦死した。戴望の母も湖州が陥る時その行方を失つた。このやうな悲劇は至る處にあつた。同治二年になつて陳奐は上海に身を避けたが、この頃になつてさしも猖獗を極めた長髮賊の亂も、曾國藩、李鴻章と、英佛軍との合作によつて次第に鎮壓された。兩江總督曾國藩は、陳奐の弟に楊峴から、とくに此の世を去つたものと思つてゐた陳奐が、今上海に身を避けてゐるとき、急いで安徽に招かうとした。がその時陳奐は急疾を以て同治二年（1863）六月二十九日、上海龍華の郝氏の寓で卒した。年七十有八であつた。妻顧孺人、子埏、皆先だつて卒し、陳奐の身邊は寂寞たるものであつた。孫の丙喜は長洲縣學附生となつてゐた。

弟子戴望は孝廉方正陳先生行狀を書き、張星鑑は陳碩甫先生傳、及書陳碩甫先生を作り、楊峴は陳先生述を書いた。陳奐の一生を考へると先づ第一によき師友に恵まれたことで、之はまことに比へやうもない幸福であつた。段玉裁といひ、王氏父子といひ、この清朝第一の學者の、而もその人々が一生の苦心を積んで、或は說文解字注、或は經義述聞、讀書雜誌、經傳釋詞の完成しつゝある時、之に親炙してその學問を承けつぐことが出來たのである。朋友にも上

に述べ來つた如き、夫々刻苦して専門の學を成した篤學者を多く持つた。或は又汪氏兄弟の如き、眞に知己といふべき人があつて、實に二十年の久しきに亘つて、この人の西湖の邸に寓して著述に耽ることが出來た。毛詩傳疏の作も一に師友の賜と感じた彼が、師友淵源記を書いた心持ちはよくわかる。而して又彼が朋友の遺書を或は校刊し、或は補ひ、亡き友の功を世に明にし、朋友の義をつくした事も亦至れりであつた。弟子にも亦馬釗、戴望などの秀才を持つた。戴望が顔氏學記と共に、管子の研究で知られるのも亦この師の與へた影響であらう。譚獻の復堂日記（同治二年五月）に、書肆に於て陳奐の手校の管子を得て、友の戴望を貽つたことがのつてゐる。この日記にはつづいて陳奐が上海で客死したことを聞き、自分は遂に一見しなかつたことを痛嘆してゐるし、その後又陳奐手校の淮南子を得たことも記されてゐる。陳奐がよく人の美を成しつゝ、己れは己れの立場を以て、毛詩傳疏のやうな名著を世に貢獻したことは、眞に學問の尊さを知る者にして始めて行き得る道であつた。

陳奐の三百堂文集の存否は知らぬ。又弟子の管慶祺が年譜を作つたと戴望は記してゐるが之も見ない。こゝには三百堂文集と題して王大隆の輯めた陳奐の文集に多く依つた。そのほか續碑傳集の諸記事、又上述諸書の序跋、劉盼遂氏の王氏父子年譜、段玉裁年譜などを参照したが、年月に於て往々互に矛盾するところがある。つとめてその矛盾をなくして大體の年譜を豫め作つてみたが、尙闕くところもあり、又誤もあることかと思ふ。

（昭和十六年正月稿）